

輪島塗展示資料室

輪島塗展示資料室は、輪島における漆器の遺産と、この工芸における共同作業の伝統を展示しています。この資料室は、輪島における重要な漆器の保存を助け、輪島塗の歴史と工程を一般の人々に説明するために、漆器職人の協同組合が設立したものです。訪れる人は、地元の職人による古典的作品と現代の作品を見ることができ、輪島塗がどう作られるかについて学ぶことができます。

工程について学ぶ

輪島塗では、1つの器を作るのにも、100を超える段階が必要です。輪島塗展示資料室の展示は、この工程の各段階を示しています。資料室への入口では、漆器の工程に関する動画を、5つの言語で観ることができます。

133個のお椀のある大きな展示は、最初に木を彫って磨くところから、漆を塗り最後の装飾を加えるまで、漆塗りのお椀作りの各段階を示したものです。道具と大きな写真の展示が、各段階を理解する助けになります。別の部屋には、19世紀半ばからの優れた漆器の歴史的な例が展示されており、季節の展覧会も行われます。この資料室は、約60のさまざまな作り手による現代的な輪島塗を販売している店舗の上にあります。

古くからの芸術

漆は、輪島周辺の森で育つ漆の木（学名： *Toxicodendron vernicifluum*）の樹液です。この地域では、イトスギ、ケヤキ、トネリコも育ちます。これらの木は、耐久性があり加工もしやすいため、漆を塗る素材を彫ったり、ろくろで作ったりするのに使われます。石川県の遺跡で見つかった漆器（「塗」）の例は、日本における漆工の歴史は遠く縄文時代（紀元前 14,000 年～紀元前 300 年）までさかのぼることを示唆しています。

輪島の独自性

輪島塗は、その耐久性で知られており、地元でとれる珪藻土（「地の粉」。堆積岩の一種で、細かい粉に砕くことができます）を使うことが特徴です。これを漆と混ぜて、耐久性のある下地を作ります。また、輪島の職人たちは、壊れやすい部分（お皿や椀の薄い縁など）を補強するために布を用い、何百年も長持ちする器を作ります。滑らかで光沢のある表面にするため、30 層もの漆を塗ることもあります。漆は手作業で塗られ、その後、ほごりのない環境で約 24 時間乾かします。この全工程は、着手から完了まで何か月もかかることがあります。

輪島塗には、16 世紀までさかのぼるものもあります。輪島の漆器産業は、漆器に対する京都と大阪の高い需要に支えられて、急速に発展しました。輪島の漆器職人たちは、それぞれの製作段階に分かれて仕事をしました。これにより、職人たちは、競争力のある価格で、質の高い品を大量に作る

ことができました。この仕事が、森で働く人や木工職人から、漆を塗る職人、装飾を加える工芸家まで、専門家たちの社会全体を支えてきたのです。

現在も、さまざまな職人たちは、工程の特定の段階を専門としています。漆を塗る「塗師屋」は、顧客との相談や他の職人への依頼から、仕上がった品の納品まで、プロジェクトマネージャーの役割を担います。